論文

日本語における「キョウダイ名」

福嶋秩子
新潟県立大学

Kinship Terms Used for ‘Siblings’ in Japanese

FUKUSHIMA, Chitsuko
University of Niigata Prefecture

Abstract: Kinship terms used for ‘siblings’ have been chosen as the forthcoming topic for making *Linguistic Atlas of Asia and Africa*. Based on the three criteria proposed by Matsumoto (2006) and Murdock (1968), terms for ‘siblings’ in Japanese are examined as the first step. The three criteria are distinctions of relative age, sex, and relative sex. Contemporary Japanese has a system of four words defined by distinctions of relative age and sex, while old Japanese had a system of two words defined by distinctions of relative age (‘elder sibling’ vs ‘younger sibling’) but also a system of three words defined by relative age and sex (‘elder brother’, ‘elder sister’, and ‘younger sibling’). Hachijo dialects have a system of three words defined by relative age and sex which is similar to that of Old Japanese. Ryukyu dialects have a system of four words combined by the system of relative sex, sex and relative age: the primary distinction is between ‘sibling of the same sex as Ego’ and ‘sibling of opposite sex’. How this complicated system is retained in Ryukyu dialects is examined based on the data from *Zusetsu ryuukyu-go jiten* (1981). The system of relative sex is mostly retained, while a system of two words defined by distinctions of relative age is being threatened by a system of three words defined by distinctions of relative age and sex.*

キーワード：キョウダイ名；古代日本語；琉球方言；八丈方言
Keywords: Sibling terms; Old Japanese; Ryukyu dialects; Hachijo dialects

1. はじめに

このたび東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「アジア・アフリカ地理言語学研究」において「キョウダイ名」をとりあげることが決まり、筆者がそのコーディネーターを行うことになった。世界の言語におけるキョウダイ名の体系とその分布については松本（2006）およ

福嶋秩子 (2021)「日本語における『キョウダイ名』」『地理言語学研究』1: 115–122. doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.5529312
* 本研究は JSPS 科研費 JP 19K0055 の助成を受けたものです。

び Murdock（1968）に詳しく記述されているが、本稿では日本語におけるキョウダイ名についてあらためて調査し、研究の出発点としたい。

2. キョウダイ名の体系と日本語における多様性

松本（2006）によると、「キョウダイ名」は次の３つの観点により整理できる。

１．　本人から見た年齢差：年上~年下
２．　相手の性別：男性~女性
３．　本人から見た性差：同性~異性

これらは、順に Murdock（1968）における criteria of relative age, sex, and relative sex にあたる。

現代日本語は、以下のように本人から見た年齢差と相手の性別が交差した体系で、松本（2006）のいう年齢・性別４項型である。

表1：現代日本語

	相手の性別：男性	相手の性別：女性
本人から見た年齢差：年上	アニ	アネ
本人から見た年齢差：年下	オトウト	イモウト

ちなみに、英語は、相手の性別のみが問題となる、松本（2006）のいう性別 2 項型である。本人から見た年齢差を示すには、年上には elder や big、年下には younger や little をつけた複合語となる。

表2：英語

相手の性別：男性	相手の性別：女性
brother	sister

一方、古代日本語には、本人から見た年齢差が問題とされる体系があった。兄・姉を示すエと妹・弟を示すオトである（日本国語大辞典[1]）。松本（2006）のいう年齢 2 項型である。しかし、これらは複合語の一部として使われることが多く、同時に、年上について相手の性別を区別する、年齢・性別３項型があった（松本 2007:9）。なお、年齢差に加えて相手の性別を示すのに、男性には

[1] ジャパンナレッジで『日本国語大辞典』を検索して参照した。以下、同様。

ヒコ、女性にはヒメをつけた、エヒコ・エヒメ・オトヒコ・オトヒメのような複合語もあった（松本 2006:391）。

表3：古代日本語

本人から見た年齢差：年上	エ
本人から見た年齢差：年下	オト

	相手の性別：男性	相手の性別：女性
本人から見た年齢差：年上	アニ	アネ
本人から見た年齢差：年下	オト	

日本の方言では、八丈島と琉球に現代日本語と異なる体系があることが知られている。

八丈方言は、古代日本語と同じ、年上について相手の性別を区別する、年齢・性別 3 項型である（松本 2006:302）。また、『現代日本語方言大辞典』（きょうだい）の八丈についての記載によれば、「きょうだい」を表す総称としてオトーネがあり、「オトは年下のきょうだい、アネは年上のきょうだいの意。両者をあわせてきょうだいの意になる」とのことである。この総称の存在は、かつて年齢 2 項型が存在したことを想像させる。

表4：八丈方言

	相手の性別：男性	相手の性別：女性
本人から見た年齢差：年上	アシ―	インネ
本人から見た年齢差：年下	キョーデア	

『現代日本語方言大辞典』の「きょうだい」の項目をみると、本土方言については、キョウダイ以外に、オトドイもしくはオトデが鳥取、島根、広島、徳島で使われていた。『日本国語大辞典』で、「兄弟・姉妹」を意味する「おととい」の項目の方言の欄をみると、三重・滋賀・和歌山・兵庫・奈良・鳥取・島根・岡山・広島・徳島・香川・愛媛・高知で使われていた。この語の語源が古代日本語の年下・年上のきょうだいを示す語が複合した「オト」＋「エ」もしくは「オトト」＋「エ」だとすれば、八丈方言のオトーネに通じるものがあり、興味深い。なお、この語の分布は関西・中国・四国地方に限られている。文献では、高野本平家物語、御伽草子、日葡辞書などの出典がある。中世以降に一時期広がったが全国には広まらなかったものと考えられる。

一方、琉球方言では、本人から見た性差と本人から見た年齢差、さらに相手の性別が交差した複雑な体系となっている。古典沖縄語では、表 5 のような性差・年齢・性別 4 項型となる（松本 2006:392, 411）。琉球は、女きょうだいが男きょうだいを守護すると信じるオナリ神信仰のある社会である。そのような背景とキョウダイ名には密接な関係がある。

表5：古典沖縄語

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="2"></td><td colspan="3">本人から見た性差</td></tr>
<tr><td>同性</td><td>男性から見た
女きょうだい</td><td>女性から見た
男きょうだい</td></tr>
<tr><td rowspan="2">本人から
見た年齢差</td><td>年上</td><td>セザ</td><td rowspan="2">ヲナリ</td><td rowspan="2">ウェケレ</td></tr>
<tr><td>年下</td><td>オトジャ
オトト</td></tr>
</table>

『現代日本語方言大辞典』の「きょうだい」の項目をみると、琉球語にもキョウダイの系統が分布する。『日本国語大辞典』の「きょうだい」の項目の語誌の欄にあるように、キョウダイは、「出自は漢語であるにもかかわらず古くから使用されていたことにより、身近な日本語として浸透していたようで」、琉球にも古くに入ったと考えられる。

3. 琉球方言におけるキョウダイ名の体系の変容

日本語の本土方言については、八丈島以外は、異なる体系は見当たらず、基本的に年齢・性別 4 項型だと考えられる。一方、琉球方言は、図 5 に示したような独特の体系をもつ。『図説琉球語辞典』（1981）にキョウダイ名についての詳しい調査結果があったので、古典沖縄語の体系が琉球方言でどのような変容をとげているのか確認するために地図化を行った。

『図説琉球語辞典』の「02 人間」の「男きょうだい」、「女きょうだい」、「兄」、「姉」、「弟・妹」の 5 枚の言語地図から地点ごとの語形を読み取って Excel で整理し、新しい観点から ArcGIS online で作図した。地図化のポイントは以下の 3 点である。

a. 【男きょうだい、女きょうだい】本人から見た性差の区別が維持されているか

b.【兄、姉】性別に関係なく年上のきょうだいを示す名称をもっているか

c.【弟・妹】性別に関係なく年下のきょうだいを示す名称をもっているか

2.1. 男きょうだい、女きょうだい

図 1 を参照せよ。本人から見た性差の区別が維持されているかについて、古典沖縄語のヲナリ・ウェケレに対応する名称をもっているかという観点から作図した。琉球のほぼ全域にわたってこの区別が維持されていた。どちらかの語形がなくなったり（一部維持）、どちらもなくなっていたりする地点は総数としては少ないが、奄美地域に多いことがわかった。

2.2. 兄、姉

図 2 を参照せよ。性別に関係なく年上のきょうだいを示す名称をもっているかについては、古典沖縄語のセダに対応する形式が「兄」「姉」の地図にあまり現れていないことから、兄・姉をあらわす個別の名称をもっているかで作図した。兄・姉をあらわす個別の名称をもっている地点がほぼ全域にある一方、個別の名称をもたない地点（赤い○）、セダを兄を表す名称として使っている地点（青い二等辺三角形）、兄・姉のどちらかの名称を持っている地点（青い半円）が 3 層の周圏的分布を示していることがわかった。これは、性別に関係なく年上のきょうだいを示す名称が使われなくなる過程を示しているように思われる。すなわち、同性における年齢 2 項型体系が、年上について相手の性別を区別する年齢・性別３項型へと移行しつつあることになる。

2.3. 弟・妹

図 3 を参照せよ。性別に関係なく年下のきょうだいを示す名称をもっているかについては、古典沖縄語のオトトに対応する名称をもっているかを確認して、その有無を作図した。もっていない地点は 2 地点しかなく、概ね全域で維持されていた。

4. おわりに

松本（2006）や Murdock（1968）によるキョウダイ名の分析における、本人から見た年齢差、相手の性別、本人から見た性差の３つの観点は、日本語の中でも、その言語の特徴や歴史的変化、地理的変異を説明する際に有効であることがわかった。

アジア・アフリカ言語地図において、この項目の地図化を行うにあたっては、たくさんの言語・語族にまたがって共通の指標が必要である。３つの観点をなんらかの形で記号に反映した地図化は可能なのだろうか。それとも、３つの観点の組み合わせの型に対して、記号を与えた方がよいのだろうか。松本（2006）および Murdock（1968）は、それぞれ異なる型を提案している。これらの研究

を参考にして記号を提案し、体系が比較できる地図化が可能となるよう、検討していきたい。

参考文献/References

中本正智 (1981)『図説琉球語辞典』東京：力富書房金鶏社.

平山輝男他編 (1992) 『現代日本語方言大辞典』東京：明治書院.

松本克己 (2006)「第18章　世界諸言語のキョウダイ名」『世界言語への視座　歴史言語学と言語類型論』東京：三省堂.

松本克己 (2007)『世界言語のなかの日本語　日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂.

Murdock, George Peter (1968) Patterns of Sibling Terminology. *Ethnology* 7(1): 1–24. https://www.jstor.org/stable/3772805

ジャパンナレッジ　https://japanknowledge.com/　日本国語大辞典.

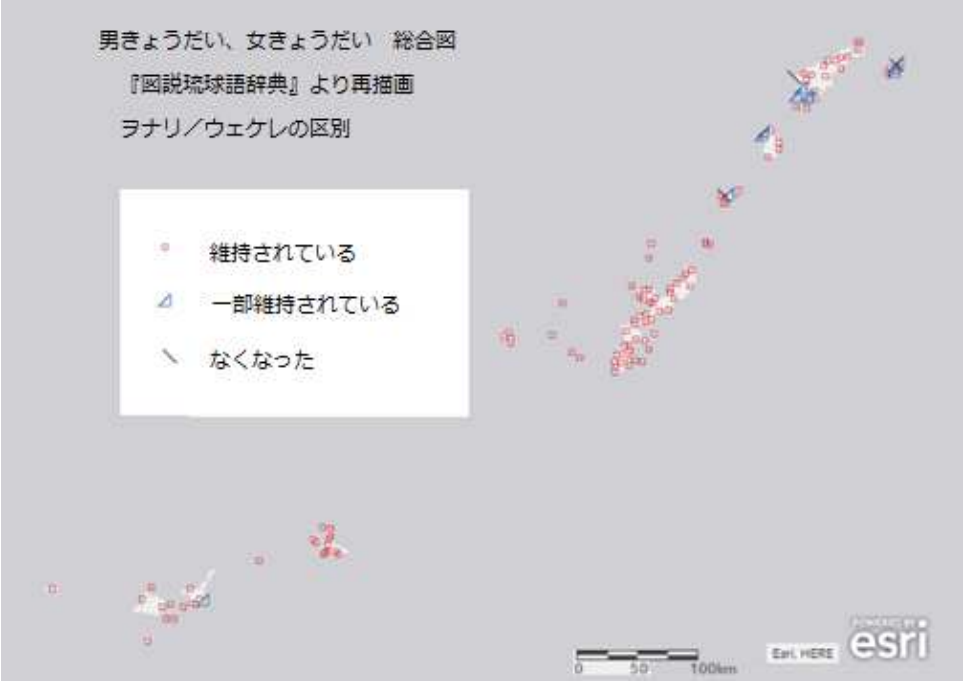

図１：男きょうだい、女きょうだい　総合図　（『図説琉球語辞典』）

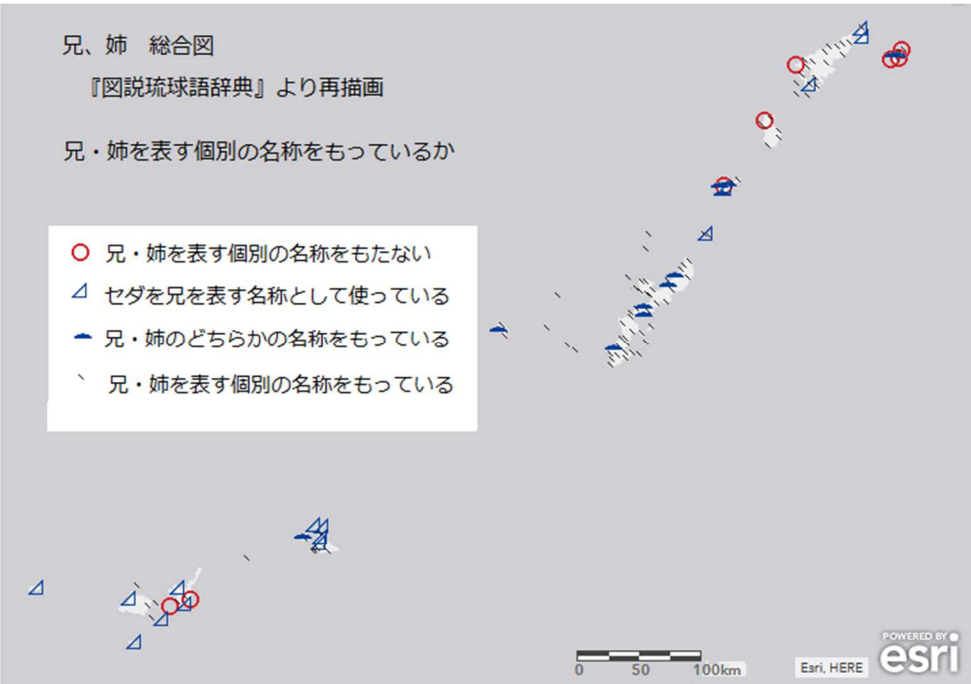

図2：兄、姉　総合図　（『図説琉球語辞典』）

図3：弟・妹　総合図　（『図説琉球語辞典』）

出版情報

採用決定日：2021年8月31日